京都シンポジウム
「総合的地域研究の新地平——アジア・アフリカからディシプリンを架橋する——」

市川光雄（いちかわ みつお）

Ⅰ　21世紀COEプログラム「総合的地域研究拠点の形成」について
Ⅱ　フィールドワークを通した教育と研究の統合的推進
Ⅲ　シンポジウムの構成と内容
Ⅳ　総括と展望

Ⅰ　21世紀COEプログラム「総合的地域研究拠点の形成」について(注1)

2006年11月９日～13日に，京都大学時計台記念館において，標記のタイトルを冠した国際研究集会が開催された。この催しは，2002年度から始まり，2006年度に最終年度を迎えた21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」（副題：フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進）の成果発表の場として企画されたものである。

周知のように21世紀COEプログラムは，「我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を学問分野毎に形成し，研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため，重点的な支援を行い，もって，国際競争力のある個性輝く大学づくり推進すること」を目的とするものである。審査のため10の「学問分野」が決められ，初年度の2002年度には，10分野のうちの５分野について申請が受け付けられた。生命科学，化学・材料科学，情報・電気・電子，人文科学，そして学際・複合・新領域である。各分野はさらに細分野に分かれており，私たちのプログラムは，「学際・複合・新領域」分野の細分野「地域研究」において他の４拠点(注2)とともに採択され，「アジア・アフリカ地域研究統合情報化センターの設立」,「統一研究テーマ『地球・地域・人間の共生』にそった研究活動の推進」,「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究の展開」という３つの柱を設定した。これらはここで紹介するシンポジウムの趣旨とも密接に関連するので，まずこの３つの柱について簡単に紹介したい。

まず「アジア・アフリカ地域研究統合情報化センターの設立」(注3)であるが，これは，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が東南アジア研究所，アフリカ地域研究資料センターと協力して計画したものであり，同センターの活動をプログラムの予算によってハード面（機器や資料の購入），ソフト面（地域研究における情報化の推進と専門家の養成）の両面において支援するとともに，同センターの活動を先取りして実施するものであった。地域研究統合情報化センターの役割は，臨地教育・臨地研究を支援・補完し，アジア・アフリカ地域に関する多元的な情報を統合的に蓄積，加工，発信する

とともに，アジア・アフリカ地域研究にかかわる研究者・機関との情報・ネットワークの国際的な結節点として機能することである。このような機能をもつ地域研究の情報・ネットワークのセンターは，東南アジア研究所が主管組織となり，アジア・アフリカ地域研究研究科とともに取り組んだ特別推進研究「アジア・アフリカにおける地域編成――原型・変容・転成――」（1998～2002年度）の成果として期待されたものであった。

つぎに，研究・教育活動を進めるにあたって，私たちのプログラムでは以下の３点を考慮して，重点的に取り上げる統一研究テーマを設定した。第１は，「総合的地域研究」の推進であり，これについては下に詳述する。第２は，アジア・アフリカ地域研究研究科ならびに東南アジア研究所によるこれまでの研究の特色，すなわち，生態や環境に関する研究に重点をおくこと，そして第３が京都大学の基本理念「地球社会の調和ある共存」との関連性である。これらの配慮から，統一テーマ「地球・地域・人間の共生」が設定され，そして，このテーマに関連して，「人間生態問題群」，「政治経済問題群」，「社会文化問題群」，さらに「文理融合」や「地域間比較」に向けた方法論を考える「地域研究論問題群」という４つの問題群が絞り込まれた。

私たちの拠点では「総合的地域研究」を看板にしているが，これは京都大学に特有な地域研究の形である。アジア・アフリカ地域研究研究科や東南アジア研究所はそれぞれ，自然科学，人文・社会科学など，多様な専門分野のバックグラウンドをもつ教員を擁しているが，そこにおける研究テーマもこのような事情を反映して，学際的（inter–disciplinary，あるいはmulti–disciplinary）あるいは領域横断的（trans–disciplinary）な性格をもつものが多い。しかしこれは，「地域」が自然（生態）と文化，社会，そして歴史の交錯する場であることを考えればむしろ当然といえる。実際，私たちのプログラムで取り上げてきたテーマのなかには，「在来性を重視した農業開発」や「乾燥地における生業適応」，「野生動植物資源の保全的利用」などのように，地域の生態環境とそれを利用する技術，地域住民の文化・社会に関する深い理解を必要とし，文理融合的なアプローチや理解の方法が前提となっているものが多い。また最近では，地域の歴史や景観，社会の動態等に対してRS（リモートセンシング）による景観解析やGIS（地理情報システム）などの新しい方法論が試みられているが，これらは，従来は人文・社会科学の分野とされた領域に自然科学的方法を援用したものである。私たちはテーマの上でもまた方法論の面からも，このような文理融合的あるいは複合的なアプローチを総合的地域研究の一環として積極的に取り入れてきた。

現在，世界では急速に政治，経済，情報等のグローバル化が進んでおり，そうした状況のなかで，地域に関する問題の把握とその解明・対処法に関しても急速にグローバルなネットワーク化が進んでいる。総合的地域研究の第２の要素は，世界的視野に立った地域の理解，あるいは地域間の比較を視野に入れた地域研究である。単にアジアやアフリカの特定地域のことだけを研究するのではなく，特定地域のことをよりよく理解するためには，他地域にも目を向けるとともに，世界の中でのそれらの地域の位置づけを考える必要がある。具体的には今回のシンポジウムで取り上げられたような問題，すなわち

自然の保護とその持続的利用や，開発と文化，民主化との関係，そして世界的な広がりをみせる人口移動や難民問題など，世界共通の課題でありながら地域によって異なった取り組みが必要な問題や，RSやGIS手法の地域研究への応用といった新しい方法論の可能性など，いくつかの共通テーマを取り上げて地域間の比較を行ってきた。

私たちはこのようにして地域を全体的視点から理解すること，すなわち地域研究における基礎研究を推進する一方で，地域が抱える現実的な問題である，環境保全や貧困，地域開発にかかわるような，応用的な問題にも取り組んできた。基礎研究とそうした応用研究の結合ということが総合的地域研究の３番目の要素である。

私たちが考える総合的地域研究の第４の要素は「フィールドワークを通した教育と研究の統合」である。これは私たちのプログラムで設定した三本柱のなかで，もっとも重要なものであるので，少し詳しく説明したい。

Ⅱ　フィールドワークを通した教育と研究の統合的推進

京都大学では，東南アジアやアフリカにおけるフィールドワークに立脚した地域研究に関する長い歴史と豊富な経験があるが，この分野における教育の歴史はあまり長くはない。これまでにも，東南アジア研究所の生態系の教員が京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻で教育に従事し，また現在のアフリカ地域研究専攻の教員が理学研究科の人類進化論講座において大学院生の指導にあたってきたが，より広い分野で本格的に大学院教育に取り組み始めたのは，十数年ほど前からである。

1993年度に，京都大学大学院人間・環境学研究科の文化・地域環境学専攻内に東南アジア地域研究講座とアフリカ地域研究講座が設置された。その後，この２つの講座が母体となって，1998年度に現在のアジア・アフリカ地域研究研究科が立ち上げられた。この間，教員たちが直面した深刻な問題は，フィールドワークを根幹の方法とする地域研究の教育において，費用のかかる学生たちのフィールドワークをどのように促進するのか，そして，海外で実施されるフィールドワークを通しての教育を，第一線の研究活動と結合させるにはどうすればよいか，ということであった。

私たちのプログラムの副題にある「フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進」は，この問題に正面から取り組もうとの姿勢を表したものである。すなわち，プログラムによって学生のフィールドワークを支援し，MOU（国際学術交流協定）に立脚して設立されたフィールド・ステーション等において教員・学生が「同じ釜の飯」を食い，臨地研究に従事することによって，「現場」での第一線の研究活動をともにつづけながら教育と研究を一体的に推進させようという意図をもって進められた。

私たちのプログラムがフィールドワークを重視したのは単なるフィールドワークの伝統の継承を越える理由があった。これまでの地域研究は，植民地期の旧宗主国や第２次大戦後のアメリカで行われた研究のように，「支配」の確立や政治的意図のもとに行われた研究が多かった。しかし私たちの拠点が目指したのは，地域に密着し，地域の人々との共生に向けた研究であっ

た。具体的には，フィールドワークと現地語による調査を重視した研究を推進することであり，フィールド・ステーションの構築はこうした研究・教育活動を支援・強化するものであった。なかでもフィールドワークは，二次資料の蓄積が乏しい我が国の若手研究者が短期間で卓越した業績を上げるためには，独自の着想により，自らフィールドで収集した一次資料に基づく研究が効果的との判断によるものであった。こうした一次資料に基づく地域研究を通して，これまで我が国ではもっぱら碩学すなわち長年の研鑽を積んだ研究者，あるいは海外への留学経験者が果たしてきた国際的発信の役割を，日本発の成果として若手研究者が積極的に担うことができると考えたのである。今回のシンポジウム・ワークショップもそのような若手研究者らによる成果発信の場と位置づけられている。ちなみに，シンポジウムと前後して実施した外部評価においても，本プログラムが現地研究者・学生と共同で推進するフィールドワークに対して，「ポスト・コロニアル批判に応えるもの」（James Fairhead，英国サセックス大学教授），あるいは「人文社会科学の新たな展開に貢献するもの」(内堀基光放送大学教授)，といった評価を得ている。

このプログラムによって，これまでに延べ140名近くの大学院生と，延べ50名の教員・COE研究員等をアジア・アフリカのさまざまな地域に派遣し，フィールドワークとそれを通しての教育にあたってきた。これらの活動の詳細は私たちのプログラムのウェブサイト（http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/index_j.html）に掲載されているとおりである。そして，プログラムの最終年度にあたる2006年11月に，これらのフィールドワークの成果を世界の学界に向けて発信するとともに，私たちが進める「総合的地域研究」について議論する場として今回の企画が実現したのである。

Ⅲ　シンポジウムの構成と内容(注4)

1．シンポジウムの構成

このシンポジウム・ワークショップは，とくに若手研究者・大学院生による成果発信の場と位置づけられていた。若手研究者がフィールドワークによって進めてきたアジア・アフリカ地域に関する研究の成果を，世界の関連分野の第一線で活躍する研究者を招いて披露するとともに，彼らと議論を交わすことを目的とした。COEのシンポジウムといえば，国際的にすでに名声を確立している研究者を招へいするのが多いようであるが，私たちの拠点ではむしろ，我が国の若手研究者が国際的な場で成果発信をすることに重点をおき，今後も国内外でともに築いていけるような将来性のある研究者の招へいを考えた。今回招へいした研究者が比較的若い世代であることはこのような事情によるものである。

会議は，４つのメインパネル（全体会議）と８つのワークショップ（分科会）からなり，ワークショップは，全体会議に先立つ２日間と全体会議後の１日の合計３日間をかけて開かれた。会場は，メインパネルが時計台記念館国際交流ホール，７つのワークショップは会議室を使ったが，映像を用いたワークショップのみは500人収容の時計台記念館ホールで行われた。またポスターセッションでは，主として大学院生による合計34件ほどの個別発表があったほか，ア

ジア・アフリカの12カ所に設けられたフィールド・ステーションからそれぞれの活動を紹介するポスターが掲示された。当然ながら，これらは質疑応答を含めてすべて英語による発表である。

2．プログラム

＜11月９日（木）午前・午後＞

サテライトワークショップ１　「価値を生み出す創造力のゆくえ――価値の構築過程における行為と反照性の人類学――」（Whose Creative Energy? : Action and Reflection in the Construction of Value）発表８件

サテライトワークショップ２　「南部アフリカにおけるグローバル化とローカリティ――地域社会の視点から――」（Globalization and Locality in Southern Africa : A View from Local Communities）発表７件

サテライトワークショップ３　「地方分権下の自然資源管理と海域生活世界――インドネシア・スプルモンデ諸島から――」（Natural Resource Management in the Maritime World of the Spermonde Archipelago under the Regional Autonomy Policy）発表８件

＜11月10日（金）午前・午後＞

サテライトワークショップ４　「創られた自然景観――アフリカ・アジアの生態史――」（Constructing Rural Landscapes : Illustrating the Ecological Histories of Africa and Asia）発表９件

サテライトワークショップ５　「地域研究における映像的な知の探求」（Expanding the Horizon of Area Studies through Film Presentation）発表（上映）12件

サテライトワークショップ６　「移動民がみた『故郷』――移住とコミュニケーションの動態から――」（Migrants and Homelands : Dynamics of Networks and Communication）発表８件

ポスターセッション発表34件およびフィールド・ステーションのポスター

＜11月11日（土）＞

【京都シンポジウム開会の辞】

午前：メインパネル１　「景観の自然史・環境の社会的構築」（Natural Histories of Landscapes /Social Construction of the Environment）

午後：メインパネル２　「地域情報学の展開」（Development of Area Informatics）

午後：ポスターの口頭発表およびポスターセッション（午後１時間のコアタイム含む）

懇親会

＜11月12日（日）＞

午前：メインパネル３　「人の移動と社会空間の生成――変動する地域への視座――」（The Construction of the Migrants' Social Spaces : Issues of Mobility, Locality, and Trans-border Networks）

午後：メインパネル４　「アジアとアフリカにおける開発と民主化の展望――ローカルな視点から――」（The Future of Development and Democratization in Asia and Africa : Local Perspectives）

＜11月13日（月）午前・午後＞

サテライトワークショップ７　「ユーラシア・アフリカ遊牧社会のゆくえ――『移動性』と『柔軟性』の可能性をさぐる――」（Mobility, Flexibility, and Potential of Nomadic Pastoralism

in Eurasia and Africa）発表８件

サテライトワークショップ８　「『地域』をつくるバナナとエンセーテ――アジア・アフリカにおけるバショウ科作物を基盤とする持続的生業システムの比較研究――」（The Making of Banana and Enset Areas in Asia and Africa : Comparative Studies of Livelihood Systems Based on the Banana-family Crops）発表８件

会議では，口頭発表分が４つのメインパネルで合計17件（うち外国人が10件），８つのサテライトワークショップで合計68件（外国人31件），短い口頭発表を伴うポスター発表が34件（外国人５件）で，発表総数は119件に及んだ。それらのプロシーディングスが会議に間に合うように出版されたが，それは総計566ページに達する分厚いものになった。しかも，このプロシーディングスには８つのサテライトワークショップで発表された論文についてはアブストラクトしか載せられていない。これだけの規模のシンポジウムの全貌を伝えることは紙幅の関係から不可能なので，本稿ではメインパネルを中心に紹介することにしたい。

３．各セッションの内容と主な論点

(1) メインパネル１「景観の自然史・環境の社会的構築」

人間は環境に意味を見いだすだけでなく，その意味に則して環境に働きかける。したがって，景観にはそこに生きる人々の環境認識があらわれているだけではなく，人々の生活の営みの歴史が刻印されている。とりわけ，グローバル化が浸透し，科学的知識の影響力が増大している現代社会では，自然主義と社会構築主義，実用主義と主知主義といった二項対立的な図式を越える視座が必要とされている。このセッションではこうした見地から，アジア・アフリカで環境への働きかけと認識に関して行われてきたフィールドワークの成果に基づき，自然と社会の動態的な関係が論じられた。

このセッションの発表者は，いずれも文化的なプロセスとしての自然（環境）と社会の関係についてさまざまなアプローチから研究を進めてきた。それらの異なるアプローチを積極的に位置づけ，環境をめぐる知識と科学，政治の関係についての議論と知識観についての議論を接合することによって，自然と社会の動態的な相互反映性のあり方を解きほぐすというのがセッションの趣旨であった。発表者は，“New Perspectives in Understanding West African Environmental History : Evidence from the Forest Region of the Republic of Guinea” を発表したJames Fairhead（University of Sussex），セッションのオーガナイザーでもあり，“An Indigenous Concept of Landscape Management for Chimpanzee Conservation at Bossou, Guinea” を発表した山越言（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科），“Two Ways of Looking at a Mangetti Grove” について発表したThomas Widlok（Max Planck Institute for Psycholinguistics / University of Durham），そして “Embodied Space : Actions within Navigation Practice in the Kalahari Environment” について話した高田明（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）の４名である。

なお，このセッションは，ワークショップ４「創られた自然景観――アフリカ・アジアの生態史――」と密接に関連しており，そこでは日本の水田景観や京都周辺の植生景観の歴史的変

化，東南アジアの水田植生，アフリカ乾燥地植生への人為の関与と動物の分布，アフリカ熱帯雨林における人為の関与，アマゾンの黒色土の形成，アフリカの森林――サバンナ移行帯の植生変化など９件の発表が行われた。これらは，景観形成における人為の関与が，高度に人工的な景観である日本や東南アジアの水田や居住地の周辺だけでなく，これまでは「自然そのもの」と考えられて奥地にまで及んでいることを指摘しており，景観の歴史性についての新しい見方と分析の方法を提供するものであった。

以上のように，このセッションは本プログラムで進めてきた「総合的地域研究」すなわち，文理融合，地域間比較，基礎研究と応用研究を統合する企画でもあった。文理融合については，地域における景観の見直しや景観史などのさまざまな新しい視点を提供できたが，地域間比較については，日本と東南アジア，そしてアフリカの景観の比較についてもう少しつっこんだ議論が必要ではなかったかという意見が参加者からのアンケート結果にあった。この点は今後に残された課題である。

(2) メインパネル２「地域情報学の展開」

このセッションは，地域研究統合情報センターの設置を先取りして，私たちのプログラムが東南アジア研究所，アジア・アフリカ地域研究科と共同で進めてきた「地域情報学」の成果に関するものである。京都大学学術情報メディアセンターの協力を得てインターネットを通じた双方向のビデオ会議・遠隔講義システムを利用し，ベトナム国家大学ホーチミン校（Vietnam National University, Ho Chi Minh City）で開催された「GIS–IDEAS2006国際会議」とのジョイント・シンポジウムとして実施されたが，これはホーチミン市と京都大学を結ぶ初めてのビデオ会議の試みでもあった。

情報通信技術（ICT : Information and Communication Technology）の進展にともない，自然・人文・社会各分野の諸学においても情報技術を利用した多様な研究が進められ，いまや諸学問との学際領域を形成する広領域の一分野としての情報学（Informatics）が形成され，発展している。地域研究に関しても，地理情報システム（GIS : Geographical Information System）やリモートセンシング（RS : Remote Sensing）の活用にみられるように，情報学を積極的に採り入れた先駆的な研究が盛んになりつつある。情報学が地域研究に新たなアプローチや知見を与える道を切り拓くとともに，逆に地域研究への応用を通じて情報学がさらに展開することが期待されている。このセッションでは，こうした地域研究と情報学の現状に鑑み，ICTを利用した地域研究の事例や研究成果について発表するとともに，新しいディシプリンの創出についての議論を深め，地域研究と情報学のコラボレーションと融合を目指した。

柴山守（京都大学東南アジア研究所）によるオープニング・アドレスのあと，荒木茂（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）・梅川通久（京都大学地域研究統合情報センター）による“Redefining Area : The Photo Database for Integrated Area Studies”, Pham Bach Viet（Hochiminh City University of Social Science and Humanities）, Ho Dinh Duan（Vietnamese Academy of Science and Technology）, Venkatesh Raghavan（大阪大学），柴山守による“Using Satellite Imagery to Study Urban Expansion of Hanoi, Vietnam”, 竹田晋也・鈴木玲治（京都大学アジア

・アフリカ地域研究研究科），Hla Maung Thein（Forest Department, Myanmar）による“Three-Year Monitoring of Shifting Cultivation Fields in a Karen Area of the Bago Mountains, Myanmar”, Bui Ta Long（Institute for Environment and Resources）による“A GIS-based Approach to Environmental Software Application : Research and Development” の４件の発表が行われた。

「地域情報学」はいまや，地域研究でもっとも発展の著しい分野であり，このセッションは，こうした方面にかけては先端的な研究を進めている本拠点ならでは企画であった。また，ビデオ会議が本格的な学術集会の方法として取り入れられたのも，地域研究の分野では最初の試みではないかと思う。試行的な側面があったものの，企画としては斬新であったが，日越両国を結ぶ通信事情がもう少し改善され，自由に討論が交わされるようになれば，という場面もあった。

(3) メインパネル３　「人の移動と社会空間の生成――変動する地域への視座――」

近年，人間・社会と空間の固定的な結合を前提にした従来の地域研究にかわって，地域の流動的な動態に関する注目が集まっている。政治的，経済的なグローバリゼーションが進む現代では，国民国家の枠を越える広汎な移民や移住，出稼ぎ，そして戦争や紛争に伴う強制的な排除（displacement）や再定住（resettlement）など，人々の「移動」がとりわけ顕著であるが，そうした移動の経験や移動に伴う相互交渉から導き出される社会関係のダイナミズムについての研究はけっして十分ではない。一方，トランスナショナリズム論などにおいては，移動者の主体性に着目し，国家や制度に拘束されない移動民の柔軟なネットワークが積極的に意味づけられているが，こうした議論においては，移動民の主体性を強調するあまり，移動民と地域の関係を逆に希薄化させ，地域のなかで生きる移動民の多様な姿や，移動の経験や移動に伴う相互交渉から生まれる社会関係のダイナミズムについての議論が不足していた。

このセッションではこれらの点を踏まえて，「移動」をする人々がその過程でどのような経験をし，どのように相互交渉や意味づけを行いながら，新たな社会的文化的な関係を形成しているのかについて検討した。東南アジアの大陸部と島嶼部を比較しながら，移動民が自己の文化を担いながら地域のコンテキストの中で，いかに社会空間を創造・生成しているかについて，社会関係の再編や文化的価値観の葛藤，相互交渉といった点に着目しながら問い直した。

主な発表は，王柳蘭（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）による“Creating Multiple Social Boundaries in a Borderland : Yunnanese Migrants in Northern Thailand”, Prasit Leepreecha（Chiang Mai University）による“Kinship that Binds Transnational Hmong Migrants”, 細田尚美（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）による“Bringing Home ‘Luck’ : Socio-Cultural Dimensions of Migration from Samar Island, Philippines”，長津一史（東洋大，前京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）による“Cross-Border Movements and Convertibility of Maritime Networks : A Case of the Sama-Bajau in the Sulu-Makassar Sea”, Riwanto Tirtosudarmo（Indonesian Institute of Sciences）による“Between Larantuka and Tawau : Exploring Florenese Migration Space” である。

移動や移住などはアフリカやその他の地域においても大きな問題になっているところであり，アフリカ，オセアニアをも視野に入れた議論が，関連するワークショップ「移動民がみた『故郷』――移住とコミュニケーションの動態から――」においてさらに詳しく検討されている。ここでは合計８件の発表があり，故郷と出稼ぎ先，再定住計画の影響，農村と都市，国境を越えた母村と移住地のあいだの遠隔コミュニケーションなどについて，アフリカと東南アジア，オセアニアにおけるフィールドワークの成果を具体的に提示し，地域間比較の視点からの総合的な移動研究が試みられた。

(4) メインパネル４「アジアとアフリカにおける開発と民主化の展望――ローカルな視点から――」

アジア・アフリカ地域における「開発」や「民主主義」，「ローカルな視点」などをめぐる言説は，それらが以前，脱植民地化と非同盟諸国運動の時代に有していた力を失っていると懸念する人たちが少なくない。本セッションでは，あえてこれらの言葉を使ったが，その目的は，「開発」や「民主主義」を抽象的に論じるのではなく，調査地での複雑な社会関係に身を置いた経験や，NGO活動によって社会運動を作り上げた経験に基づいて，具体的に「開発」と「民主主義」を語ってもらうことにあった。具体的な論点は，以下の３つである。第１は，具体的な社会的文脈の中で語られている「開発」や「民主主義」に関する言説の分析，第２に，政府やドナー，NGOが行う「開発」や「民主主義」のためのプロジェクトについての批判的な分析，そして第３は，ローカルな文脈における社会変容のロジックからみた，「開発」や「民主化」のプロジェクトの批判的な検討，である。これらを通して，「開発」と「民主主義」をめぐる言説と実践がアジア・アフリカのローカルなレベルで展開しているありさまを浮かび上がらせるとともに，それを通して，「開発」と「民主主義」について再検討を行った。

セッション・オーガナイザーである岡本正明（東南アジア研究所）と藤倉達郎（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）による趣旨説明のあと，西真如（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）による“Empowerment, Redistribution, and Political Engagement Activities of a Community–Based Organization : The Experience of the Gurage Road Construction Organization in Ethiopia”, Stephen J. Nindi（Sokoine University of Agriculture）による“Partnerships in Promoting Endogenous Development and a Moral Economy : Lessons from the Matengo Society, Tanzania”, Seira Tamang（Centre for Social Research and Development, Nepal）による“Problematics of Funding Civil Society and Democratic Space in Nepal”, Roem Topatimasang（Indonesian Society for Social Transformation）による“Relocalization of Democracy and Development : The Post–Soeharto Indonesian Experience”などの発表があった。また，このセッションでは著書『アナーキスト人類学のための断章』およびエール大学解雇問題で話題を呼んだDavid Graeber（Yale University）と実務経験が豊富な大岩隆明氏（JICA）がコメンテータを務めた。

このセッションは，アジアとアフリカの両方に関する話題を取り入れたという意味では地域間比較の例ともいえるが，発表者が大使館勤務やJICAのプロジェクト，政府機関やNGOの関

係者であったこともあり，地域に関する基礎研究と開発，民主化などに関する応用研究の統合を試みたものと位置づけられる。

以上のほかに，前後して開催されたサテライトワークショップでは，さきのプログラムにあげたように，さらに話題を絞った発表と議論が展開された。それぞれが興味深いテーマを扱っているが，なかでも「地域研究における映像的な知の探求」のセッションは，映像発表を主体とするユニークな企画であった。

近年，ビデオカメラ等の幅広い普及によって，フィールドワークにおいて撮影機材を利用する傾向が高まりつつある。また，映像を通して研究成果を公表したり，被調査者へ成果を還元することの可能性が模索されている。このセッションではこのような状況を踏まえて，国内外の映像人類学者と地域研究者がフィールドワークを通して制作した映像作品を発表するとともに，作品制作に関する議論を行い，地域研究における映像作品の制作と活用に関する新地平を開拓することを目指したものである。当日は，日本のほかに，フランス，イギリス，カメルーンなどから気鋭の映像作家たちが参加し，エチオピアの音楽芸人，カメルーンの都市生活者や森の民，エジプトの宗教結社，沖縄の儀礼などに関する合計12点の作品が上映されるとともに，人類学・地域研究における映像表現の可能性について熱心な議論が交わされた。映像記録・作品は私たちのプログラムで進めている「多元的情報」の重要な要素であり，今後この方面の研究が方法論および成果（作品）の面で飛躍的に発展することが期待される。なお，このセッションに関連する論文集が会議にあわせて出版されたことも付記しておきたい(注5)。

Ⅳ　総括と展望

本シンポジウムは，事務局で把握しているだけでも参加者合計が350名に達する大規模な研究集会となった。うち，外国人の参加者は82名で，このうち21世紀COEプログラムによる招へい外国人は27名であった。参加者の国別構成も，インドネシア，ベトナム，ラオス，タイ，ネパール，タンザニア，エチオピア，ウガンダ，カメルーン等のアジア・アフリカ諸国だけでなく，アメリカ，イギリス，フランス，ドイツなど，広汎な国と地域に及んでいる。また，外国人がスピーカーとなった発表は40件以上に達した。このなかには，マンチェスター大学のRichard Werbner 名誉教授など，自前で参加した研究者が少なからず含まれており，本シンポジウムに対する国際的な認知・注目度もまずまずではなかったかと思う。

今回のシンポジウムで取り上げられたテーマは，いずれも文理融合，地域間比較，基礎研究と応用研究の統合など，私たちのプログラムで進められている「総合的地域研究」の路線に沿ったものである。とくに文理融合については，本拠点のお家芸ともいうべきもので，かなり実質的な成果が発表され，議論が展開された。特定の問題に対して，複数の異なる分野の専門家が協力して解明にあたるのが「学際的」研究とするなら，一人一人がさまざまな方法論と知見を分野の枠を越えて駆使する私たちのアプローチは領域横断的と呼べるものであり，このアプローチは，自然と人間の相互作用である生業，自然と文化，歴史の所産である景観や栽培作物をめぐる研究などにおいてとりわけ有効と考え

る。

また「地域情報学」のセッションなどにおいては，従来は自然科学で用いられてきたRSやGIS，さらにはデータベースの作成や画像解析技術等の情報学的手法の地域研究への適用といった，地域研究における文理融合の新しいアプローチについての議論も展開されるなど，プログラムを通して開発・発展させた方法論の成果が披露された。

地域間比較のテーマとその方法論についてはさらに今後の展開を待つべきものが少なくないが，「移動」を焦点に据えたセッションや，バナナ・エンセーテなどの特定の作物群や地域の植生景観，民主化・開発といった地域が抱える特定のテーマを扱ったセッションでは，意識的に異なる地域の話題が取り上げられ，地域間比較が模索された。地域間の比較研究が成功したかどうかについては，今回の議論を踏まえての今後の展開如何にかかっている部分が大きいが，外国人参加者のアンケートのなかには，もっと自覚的に比較の視点を明確化し，深めるべきという意見があった。また，同じ時期に実施した外部評価においては，とくにアジアを対象にしている外国人の外部評価委員から，私たちのプログラムでアジアとアフリカの地域間比較を実施していることについて肯定的な評価を受けている。将来はこの方面の研究をさらに発展させるとともに，アジア諸国からの研究者・学生がアフリカ研究のために，また，アフリカ地域からも同様にアジア研究のために本拠点にくるというように，人材養成面，研究交流面での交差が進めば，文字通りの世界的な地域研究の拠点となるにちがいない。

21世紀COEプログラムの趣旨である人材養成の点に関しては，今回のシンポジウムには大きな成果があった。すなわち，私たちの拠点ではこのシンポジウムを最初から，大学院生や若手研究者が自らの研究成果を世界に向けて発信する場と位置づけており，そのためにシンポジウムでの発表はもとより，その構想からセッションの企画，参加者の選択と招へいの実務，そしてシンポジウムの運営の一切をこれらの若手研究者が，教員の助言を仰ぎつつ，主体的に担ってきた(注6)。ほとんどすべてのセッションのオーガナイザーを若手研究者と大学院生が務め，会議に先立って出版されたプロシーディングスもこれらの若手研究者の編集によるものであった。私たちは，今回のシンポジウムおよびプロシーディングスが主としてこれらの若手による発表によって占められ，日本人の「教授」の名があまりあらわれないことをプログラムの成果と考えている。

最後に，これらの成果を世界に向けて発信するのには，口頭だけでなく論文の形にする必要がある。外部評価を依頼した外国人研究者（人類学者）からは，「質的にはまったく問題ないので，もっと世界的な媒体を使って研究成果を発信する必要がある」という評価を受けており，今後は，その方面でのいっそうの努力がもとめられることになろう。

（注１）「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」のプログラムについては，ウェブサイト（http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/index_jcoe.html）を参照されたい。とくにプログラムの概要については，加藤剛前プログラム・リーダー（現龍谷大学教授）による記事に負うところが大きい。

（注２）東京外国語大学地域文化研究科「史資料ハブ地域文化研究拠点」，上智大学外国語学研究科「地

域立脚型グローバル・スタディーズの構築」，早稲田大学政治学研究科「現代アジア学の創生」，愛知大学中国研究科「国際中国学研究センター」。

（注３）当初は「アジア・アフリカ地域研究総合情報化センター」として構想されたが，2006年に「地域研究総合情報センター」として設立された。

（注４）シンポジウム全体の詳細については下記のウェブサイトを参照されたい（http : //areainfo.asafas.kyoto–u.ac.jp/kyotosympo/index_j.html）。

（注５）北村皆雄・新井一寛・川瀬慈編著「見る，撮る，魅せるアジア・アフリカ！――映像人類学の新地平――」（2006年11月新宿書房刊，DVD付）

（注６）シンポジウムの成功は，太田至京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科教授を中心とする実行委員会・作業部会のバックアップ体制にも負うところが大きい。記して深謝したい。

（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科教授）